




あ○ね
触手まみれ



『ね～、キミー人？ 俺たちとお昼でも食べない？ もちろんおごるからさ～』

『ウチらそこの店でバーベキューやるんだけどさ、一緒にどう？
いろいろ旨いもんあるし、楽しいぜ？』

(……………ったく、うっとうしいわね。

まあ、目立つようにしてるから仕方ないんでしょうけど)

「ッ!? この気配って……奴らがこんな明るいところで……………?」


なっ、ウソでしょ…空が……………っ!?!」

(いつの間にか周りに誰もいない……………これ、隔離されてる…!?
まさか、私の方が狙われたっていうの!?)

『ぐふふふふ……………』

「んっくう!! ちいッ…出てきたわねケダモノ!
何の小細工か知らないけど、私に勝てるとでも思って…………」

(な…ッ!? き、斬れない……………どうして…くうあっ!?
なんて馬鹿力っ…これまでのとは、桁違いに強い!?)



「くうッ…この！ はなしなさい!! ひうッ……!?

き、気色悪いっ……………なんで、急にこんな…………!?”

(このおかしい空間のせいで強化されてる!?


まったく、振り解けない…！ こ、このままじゃ…………っ)

『ぐふははは……………まっこと発育の良い娘よ。

多くのはらからどもが惹きつけられたのもうなずける』

(こんなケダモノ触手にされるがままになんて…絶対にイヤ、

何としてでも退治して……………え？ こ、声…?)



『おお……気づいたか気丈な娘よ。

我らを誘っては随分と刈り取ってくれたものだな。くくくくく……』

「しゃ、喋れたの…!? くっ…あうん!

はッ、ケダモノのくせに、少しは知能があるってわけね!」

『本当に気の強い娘だ……。

なればこそ、その豊かな肉体を弄り回し
喘がせる楽しみが増すというものよ。

感謝するぞ娘。

我らにかような感情のごときモノが芽生えたのは
おぬしの存在あってのことなのだから』

「は？ 私が何をしたって……んっくうん!？」

「ちょ…や、やめなさい!! くう…! こんな、許さな……ッ」


『我らはまだ現世に生まれ来たばかり、おぬしのごとく美しく
乳房も大きな娘を見るのは初めてなのでな』

「う、ンッ…! これまでの奴らも、それで興奮して
私に群がってたわけ? くん…ホント、ケダモノね……!」

『そやつらも我よ。

おぬしに惹かれる度、その身に触れることも
かなわなんだ無念が積もり、我らが現れた』





『さて、ようやく訪れた我らの念願だ。

まずはその深き乳房の谷を楽しませてもらおうか……くほおお…!』

(触手が胸の間に挿入ってくる……ぬるぬるで気持ち悪い。


それに、熱くてどくどく脈打ってる……いやあ)

『おおおお…!! なんと柔らかくみっちりとした谷間だ。

これ程我らの牡の根を悦ばせるとは、たいした娘よ』

(化け物のくせに性欲は人間の男そのものなのね。

女の胸を性欲を満たすために使うなんて最低だわ…っ)



『これまで種付けした女どもは泣き叫ぶばかりだったのでな……』

おぬしのその気丈な表情、たまらんわ』

「んッ…!? また、んふうン!? やめ……くう。


ケダモノ以下のクズ化け物ね……！ 絶対に、始末してやるわ!!」

『くくく…恐ろしいことだ。しかしおぬしの乳房の圧力……』

まるで膣穴に挿入したがごとくの心地良さよ』

「ふんッ……こういうのは初めてなんでしょう？

んッくう…せいぜい楽しんで、このまま射精しちゃえば？」



『悪くない誘いだが……残念ながら娘よ。


人間の牡とは違い一度精を放ったとて我らの欲は満たされぬよ』

(まあ、そうでしょうね……でも、射精は射精なんだから。
射精している間は隙が生まれる可能性も……)

『それに、我らの至上の悦びはやはり種付けよ。

この秘唇の奥…おぬしの子宮を子種で満たしてやろうぞお』

「ひッ!? きゃああッ!? くっ…この、やめなさッ……はあん♥
んッ…あッ♥ イヤあっ……やめてッ…!!」




「やめる……ッて！ 言ってるでしょうがぁ!!
くうん…!? んあッ、このお……っ!!」

『おお？ おほお……まだ抗うだけの力を持っていたとはの。
まったく…生きの良いことだなぁ娘よ』

(こいつ、今わざと力を緩めた……私が抵抗するのを楽しんでっ。
くそ、悪趣味にもほどがあるわ…！)

『さあて、おぬしの蜜壺を拝ませてもらおうか。
ほれ…股に力を込めねば、あっさりと御開帳だぞ？』



「くう…！ 言われなくたって……あんたなんかの好きにはさせない！
んんッ…せいぜい、油断してなさい！」

(こいつ、私が抵抗できるかどうかのぎりぎりの力加減で……！
こんな奴に、完全に遊ばれてる……ッ)

「絶対に…っ。 負けないんだから……！ ぐッ…ん！
私はっ……きゃうん!? ちょッ…乳首、いやあ……！」


『おお、すまぬ…あまりにも美味そうに揺れるのでなあ。
我らはやはりおぬしの乳房が好物のようだ』

「だから…って！ 乳首ッ…吸うなあ！ はあんっ…ひいうッ♥
な、なに!? あッ…やあ!? いやあ……ッ」

『気丈なおぬしもここは弱いと見える。
くくく…やはり女よ、どうだ抗う力が失せてこよう』

(ざらざらした舌みたいなので…乳首舐めまわされてるッ。
なんで、こんな……気持ち…良くな………)

「こっ…これくらい何てこと……あん♥ 無い、わ…！
私を、甘く見ると……後悔す…くうンッ♥」



『流石よ…そうこなくては面白くない。
では、人間の牡では不可能な…とっておきで楽しませてやろう』

「……えッ？ ツ!? 何を…!? あ、んああッ♡
やめてっ…いや！ あン♡ あ、あッ…ん！ はああンッ♡」

『気の強い娘の喘ぎがこんなにも心地良いモノとなあ…ぐふ。
もっと鳴け、我らを楽しませよ…!』


(こんなの、初めて…！ 乳首が、胸全体がっ…気持ち良いッ♡
だめ…足に力が入らなく…なっちゃう)

「あ…っ!? だめッ、脚い広げちゃ……きゃン♥
いや、イヤ! 乳首許してえ…! くうン!! ダメえええ!!」

『くははは…っ!! ついに御開帳だっ。残念だったなあ娘よ。
やはり女…身体の悦びには勝てぬのう』

(悔しい……っ。こんな性欲の塊みたいな奴に感じさせられて……。
それに、このままじゃホントにマズイ……)

「く…っ! んッ……そ、そうよ! 乳首気持ち良くてッ
……もういいでしょ!? これ、やめて!! はぁン♥」




『…………ぐふ、ぐふははは……。本当に面白い娘よな。
まあ良い、また次で楽しませて貰おうぞ』

「はあ、はあ…んはあ……。ケダモノめ……許さないから……」

『良い格好だぞお、娘よ。ふむ…この邪魔な布きれ、
さっさと引き裂こうかと思うたが……これもまた…』

(こうなったら、あの胸に挟んできた触手……生殖器ならきっと急所よね。
なんとか、噛みついてでも……！)




「ひうッ!? ま、待って……そこはっ!? やめて…! ねっ?
こ、今度は私が口でしてあげても……はあん♥」

『ここはかなり敏感な部分なのだろう?
もうしばらくは、おぬしの喘ぎ鳴きを聴かせてもらおうとしよう』

「やッ、あっ! んっくうん♥ そこ、ダメだっば…!!
きゃん♥ ふ、震えて……!?! んッ、うああっ♥」

『気が強くせに感じやすいようだなあ、娘よ。
お? この湿り気は……くくく、蜜がにじみ出て来たぞ』



「ち、違う…!! きゃあ♥ 濡れてなんか……ああ…もうツ!
なんで、そんな上手いのよ…!? くうん」

『ならば直接、秘唇を確かめてみようではないか。
どうやら我らも興奮とやらを抑えきれんのでな……』

「あッ……!? い、いやっ…見るなあ……ッ!!」

『おほおお…。蜜にまみれて濡れ光っているではないか。
それに湯気立つ程の雌の匂い…かぐわしきかな』

(いや…ッ、幾つもの視線が私のアソコを凝視してるみたいで……空間そのものが、興奮してる…?)

『おぬしほどの娘ならば、膣内もさぞ具合が良いのだろうなあ。
蜜の味も存分に楽しませてもらうぞ』

「ひ…!? そんな、気色悪いので……やッ、あッ、んはあ♡
こんなのってえ…だめっ、ダメ! やああ!!」

(ぼこぼこした触手が私のナカを弄り回してる……ッ。
指じゃ、絶対届かない所までえ……凄い…ッ)

『なんと甘い…！まさに甘露のごとき蜜よ。
もっとだ、もっとおぬしの愛蜜を味あわせよ……!!』

「いひゃうん♥ また、乳首い!? あッああッ、あ!
あはあ…きゃん♥ ナカあ…ッ、そこ、そこお……♥」

『膣内のヒダも力強く絡みついてきよるわ……。
人間の牡にはもったいない、我らのための極上の名器よ!』

「か、勝手なことをおッ!? やン、んッあん♥
やめてッ、やめてええ…！ あッ、ああッ…ダメええ!!」

『そろそろ達しそうなのだろうか？ 娘よ。

遠慮することは無い…我らがもたらす快楽に身をゆだねるが良い』

(ホントに気持ち良すぎるっ。でも、イキたくない…っ
こんな触手どもにイカされたくない、のに……！)

『やれやれ、気丈なうえに頑固なものよ。

だが、悦楽を耐えるは辛かろう……これではまいだ…！』

「いッ!? いあ、んああッ……♡ もっ…だめッ、だめえ!!


な、なんか来ちゃ……ッ!? んはあああッ♡」

「ッ♥ で、出ちゃう…!? 出ちゃ…ううんんッ
んあああああ……！ イツくううんんン……ッ♥」

(やだあ…なにこれえ、恥ずかしい……。
んふッ…まだ出る……。凄い、気持ち良かったあ……)

『ぐふははは……盛大に達したなあ、娘よ。
良かったであろう？ まさか、潮まで吹きよるとはなあ…』

(しお…これ？ こんなに気持ち良くイツちゃったの
初めてだから、出たの？ あ……また、触手が……)



「ひぐうんッ!? お尻、にい……ッ!? うそっ…む、無理よッ!
んあ、ああッ!? ひいあああ……!？」

『達したばかりの身体だ…力も入らんだろう?
安心して身を任せよ……ほれ、飲み込みんでいるぞお』

「な、何考えてるのよ……あんたはあ!? あひいッ!?
また、出ちゃう…! 止まらないッ…あッ、うあッ!？」


『なんとも、きつい穴だ…! 尻穴は処女だったか?
誰かに使わせてやれば良かったものをのう……』

(しょ、処女って……これは、そんなんじゃ!?
ッ……!? あ、うあ…!? う、動いちゃ……♡)

『どうした娘よ?
さっきから潮を吹きっぱなしではないか。
初めての尻穴がそんなに感じるのか?』

「か、感じて……ない…! あふううんっ♡で、でも止まらな……ッ
おっ…うああ♡何これえ……!?’

(やあ…お尻なんて、いやあ……。い、挿入れるなら…
するなら……ちゃんと…前で、アソコでえ……!!)



『んくくく……やはり蜜壺がさみしいのだな？
ならば、我らの牡の根…今すぐねじ込んでやろうぞ……!!』

「ひッ…!? な、何よそれ……!? なんでそんな、大きく!?
無理ッ、ムリよ! は、挿入るわけがああ!？」

『おっほおおおお……!? 我らが巨根を受け入れるとは
なんと柔軟な膣肉よ。奥まで引き込まれるようだ』


(し、信じられない…。あんな、太いのが私のナカに……!
はあ、熱くてごっごっしてる…凄いい……)

「あッ、はぁん…♥ い、いきなりそんな……激しくう…!?
やはあッ、あ！ ああ♥ ひやうッ…んはああ」

『幾多のはらからどもが、求めた…！ この蜜壺お!!
ぐふははあ……!! 良い、良いぞっ、良いぞお!!』

(気持ち良いッ…気持ち良すぎるう♥
こんな凄いの知っちゃったら、私戻れない!? 夢中になっちゃうう♥)

「こんなのズルいッ…ナカでうねって
私の知らない気持ち良いとこばっか……すごいのおおッ♥」



「私ッ…もお、ムリい……♡ 良すぎて、壊れちゃううッ…!!
お願いッ…イカせて……！ 許してええ♡」

『ならば種付けして欲しいと請うが良い！
我らが精……子種汁を、子宮に注ぎ込んで欲しいとなあ…！』

(それだけはダメ。こんな奴らので妊娠しちゃったら……。
でも、この触手の中には…熱い精液がいっぱい……)

「ほ、欲しいい……欲しいの♡ 熱いっ……こ、子種をッ！
私の子宮に注ぎ込んで！ 種付けしてええ……♡」

『おっ…おおおおお!! 念願の、時があ……!
この……極上の女体がついに、ついに我らがモノにい!!』

「あはああ、ソツ♥ 良いのツ…そこ弄られると
我慢できないのお……!! イっ、イクう♥ イッちゃうううツ♥」

『おぬしの子宮が…子種を待ちわびて吸い付いてきよるぞお!!
射精るっ…射精すぞ!! 孕めえええ!!』

「あッ……♥ あッ…つ!? 熱いいツ♥ イツツ……くううううんツ♥」



(凄い射精だったな……。私のお腹のナカ、いっぱいになるほど射精されちゃった。
しかも、濃厚でどろどろ……。射精されてもすぐに洗えれば何とかかなるかもとか思ってたけど
……………これじゃもう、妊娠しちゃう)

『ぐふふははは……。感謝するぞ娘、いや…我らが妻よ。
おぬしが呼び覚ませしてくれた、この感情なるモノのおかげで実に愉快的な種付け交尾であったぞ』

「誰が、妻よ……。!! はあ、はあ……。ツ
私はこの程度じゃ屈しない……。必ずあんたを、駆除してやるわ」

『種付けしたばかりだというに、その気丈さは失われんか。
よかろうとも、おぬしが心底我らの牡の根に屈伏するか……。
おぬしが我らを刈り取るまで……。何度も交尾を繰り返そうぞ』

「……………や、やってやろうじゃないのっ。
はっ…あんたの子種を絞り尽くしてやるのも、悪くないかもね…！」

『口の減らぬ女よ……。くくく…ぐふふふはっ……………くははははは……。っ!!』

